

## はしがき

本報告書は、日本学術振興会科学研究費助成事業の支援を得て2012年度より2014年度まで推進している基盤研究(B)課題研究「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」(Comprehensive Study on Language Education Methods and Cross-linguistic Proficiency Evaluation Methods for Asian Languages) (課題番号: 24320104、代表者富盛伸夫)の研究実践活動の中間報告書です。3年間の研究期間のうちの2年目に中間報告を行う理由は、本研究グループの共同研究者、研究協力者の方々が多くの貴重な調査や研究実績をあげており、かつ、時々刻々変化する現代の言語教育分野にあつて、研究調査などの報告は、まだ全体的・網羅的でないにしても、現時点でまとめて成果公開に積極的に取り組みたいと考えたためです。

わたしたちの共同研究は、すでに、2006年度より3年間遂行した基盤研究(B)課題研究「拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」(Studies on Foreign Language Education Policy and its Effectiveness in Enlarged EU Countries: 2006-2009) (代表者富盛伸夫)と、2009年度より2011年度まで推進された基盤研究(B)課題研究「EUおよび日本の高等教育機関における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」(Comprehensive Research on Foreign Language Education Policies and the Evaluation Systems for Language Proficiency in Higher Education in the EU and JAPAN) (代表者富盛伸夫)の成果と問題意識を引き継ぎつつ形成されました。その間にも、EUローカルの言語能力参照枠組みとして限定的にうけとめられていたCEFR (Common European Framework of Reference for Languages)は10年以上の確固たる実績を積み重ねつつ、言語教育における文化理解の側面を掘り下げ、さらに日本を含め非ヨーロッパ世界にも適用範囲を広げつつあります。この方向性は、私たちの問題意識とまさに軌道を一つにしていると言えます。他方で、世界の多元化、複言語主義的・複文化的な観点からは逆行するかのような、ひとつの「グローバル言語」の覇権化と声高らかな「グローバル人材」の育成が言語教育に複雑な陰を落としつつあります。残る1年間の研究期間で、私たちにはさらなる努力が求められていると認識しています。

最後に、研究遂行上、多くの研究会・講演会・シンポジウムなどを共催していただいた東京外国語大学世界言語社会教育センターと語学研究所、および国内外の大学・研究機関に感謝するとともに、運営全般を見渡し効果的なマネジメントと研究補助・編集作業をしていただいた東京外国語大学語学研究所事務補佐の深尾啓子さん、本学大学院総合国際学研究科博士後期課程学生ソ・アルムさんに深く御礼申し上げます。

研究代表者 富盛伸夫 (東京外国語大学)